外国语言文学研究文库

日本近现代文学翻译研究

康东元 著

上海交通大学出版社

日外国

日本近・現代文学の中国語訳研究

康东

内 容 提 要

本书主要考察了日本文学作品在中国翻译的数量变化与中国社会变革之间的关联性。本书具体地考察了从清朝末期至今，日本近现代文学作品在中国的翻译情况。本书所论，对中日文学翻译交流史研究及中日文学比较研究，有着重要的意义和价值。

图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学翻译研究/ 康东元著. —上海：上海交通大学出版社，2009

(外国语言文学研究文库)

ISBN978-7-313-05859-1

Ⅰ. 日... Ⅱ. 康... Ⅲ. ①日语—近代文学—翻译—研究—中国 ②日语—现代文学—翻译—研究—中国 Ⅳ. I046 I209

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 107281 号

日本近现代文学翻译研究

日本近・現代文学の中国語訳研究

康东元 著

上海交通大学出版社出版发行

(上海市番禺路 951 号 邮政编码 200030)

电话：64071208 出版人：韩建民

常熟市文化印刷有限公司 印刷 全国新华书店经销

开本：787mm×960mm 1/16 印张：9.75 字数：180 千字

2009 年 9 月第 1 版 2009 年 9 月第 1 次印刷

印数：1～1 030

ISBN978-7-313-05859-1/I 定价：24.00 元

版权所有 侵权必究

序

本研究は、中国清朝末期から現在に到るまでの百数十年にわたって翻訳された日本の近・現代文学作品がいかに中国社会と人々に受け入れられてきたかを、資料論的観点から考察したものである。具体的に言えば、各時代において日本のどういう近・現代文学作品が中国で翻訳され、紹介されているか、また中国の時代・社会の変化とどのような関連があるか、翻訳対象になった理由とその歴史的意味を考え、原本や図書館検索目録などに依って詳細に調べ、分析、整理し、中国における日本文学に携わっている研究者や一般の読者のために参考となる研究を目指すものである。

さらに、中国図書館蔵書目録(OPAC)に提供できる書誌を作るのも一つの目的である。例えば、現在中国図書館を代表する中国国家図書館、上海図書館、北京大学図書館などの翻訳作品に関する図書館蔵書目録状況を見ると、「日本語原題名」に関する情報はほとんど提供されていない。例外的に、中国国家図書館の図書館蔵書目録(OPAC)で資料を検索する時、日本文学作品の「中国語訳の作品名」と「原題名」など両方の情報が記入されているものがある。例えば、中国国家図書館の図書館蔵書目録(OPAC)の中で、赤川次郎の中国語翻訳作品『小偸必自私』(『盗みは人のためならず』)を検索すると、表1(1)に示したように、その書誌目録の中には、中国語で翻訳された題名情報を現す「題名與責任」の項目と、「日本語原題名」『盗みは人のためならず』を現す「題名」の項目が詳細に記入されている。この目録から中国或いは日本の読者、研究者たちはすぐ赤川次郎の「原作品名」を把握できる。しかし、現在まで所蔵本の数だけではなく規模の方でも中国のトップレベルである中国国家図書館の蔵書目録でも、ずべての翻訳作品に「原題名」が記載されているのではなく、ごく一部しか「日本語原題名」が記載されていないため、日本語原題名を知りたい読者の利用には不便である。例えば、表1(2)の夏目漱石の『我是猫』(『我輩は猫である』)の書誌データのように、これが読者に提供されている図書館目録であって、一般的には「日本語原題名」の情報は記載されていない。つまり、ほとんどの日本文学作品の中国語訳作品に関する書誌目録には、「日本語原題名」が記入されていない状況なのである。ただし、「日本語原題名」の書誌情報が数少なくとも記載されていることを見ると、この問題はこれからの中国図書館における翻訳作品書誌目録作成において課題になるであろう。恐らく膨大な翻訳作品の原題名を調べる時間とその調査の難し

さのため、未だに完成できなかったのだと思われる。

表 1(1):中国国家図書館のOPAC(赤川次郎の中国語訳作品『小偷必自私』(『盗みは人のためならず』)

题名与责任	・小偷必自私[海外中文图书]/(日)赤川次郎著;李毓昭译
出版项	・香港:皇冠出版社(香港)公司,1998
丛编项	・皇冠丛书.536.赤川次郎推理小说;47
语言	・chijpn
题名	・みは人のためならず(注1)
主题	・推理小说—日本—现代
	・长篇小说—日本—现代
著者	・赤川次郎　著
附加款目	・李毓昭　译

表 1(2):中国国家図書館のOPAC(夏目漱石の中国語訳作品『我是猫』(『我輩は猫である』)

题名与责任	・我是猫[专著]/(日)夏目漱石著;尤炳圻,胡雪译
出版项	・北京:人民文学出版社,1997
丛编项	・世界文学名著文库 = Literature treasury world's:珍藏本
语言	・chijpn
主题	・长篇小说—日本—近代
	・长篇小说
著者	・(日)夏目漱石(1867～1916)著
附加款目	・尤炳圻　译
	・胡雪　译

今まで調べたところでは、中国国内あるいは日本の国内の図書館でもいくつか翻訳作品をまとめた文献がある(注2)。しかし、それらはある時代の世界各国の翻訳作品とともに整理されて記載されているため、大雑把である。それに、「作家順」或いは「翻訳年代順」の通りではなく、ばらばらに記載されている。今までばらばらでしかなかった翻訳作品の記載を整理し、より検索しやすい目録を作成し、そこから見える歴史的意味を考察するのが本研究の目的である。

博士前期課程では『日本近・現代文学作品の中国語訳の書誌作成』という研究テ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ーマで、2001年9月、上海図書館、北京大学図書館、吉林大学図書館に収蔵されている1500点近い「資料」を集め、その書誌データを基に日本の近・現代文学作品が中国でどのように翻訳され、紹介されているか等を書誌学という立場から、主に資料を詳細に調べ、分析、整理した。

博士後期課程に入ってから博士前期課程の段階で集めた不十分である書誌データを埋めるため、2003年10月、11月の二ヶ月間、主に翻訳作品集を対象に上海図書館、中国国家図書館、北京大学図書館、吉林大学図書館等の現地調査を行って、5726点(作品集の中の短編小説、エッセイ、詩集の中の作品、評論、昔話などを含む)の資料を集めた。調査方法としては、現物を見たり図書館検索目録などを利用した。

中国で翻訳された日本の文学作品とその歴史的意味を探る上で、まず、現在まで集めてきた中国で翻訳された作品を作家順にそのリストを作成し、それを参考にリストからどういう作家・作品が中国で翻訳されたのかを考察した。次に、作家順で作成した翻訳作品リストを基に翻訳年代順に整理し直し、そこから中国の各時代にどういう作品が翻訳紹介され、また翻訳者がなぜ日本の文学作品を翻訳しようとしたのか、その動機を考察した。例えば、清朝末期(「甲午戦争」以後)から政治小説を始め、科学冒険小説、探偵小説、軍事小説が次々翻訳されるようになった。東海散士の『佳人之奇遇』(1898年訳)、矢野龍(竜)渓の『経国美談』(1899年訳)、大橋乙羽の『累卵之東洋』(1901年訳)、押川春浪の『空中大飛行艇』(1903年訳)、江見水蔭の『地中の秘密』(1906年訳)、桜井忠温の『肉弾』(1909年訳)等である。この時期には、政治改革——戊戌政変の失敗と対外的には列強の侵略により、当時、中国は亡国の危機にさらされていた。こういう状況のもとに、近代西洋文化、思想の影響を受けた一部の知識人たちは、国民に対する政治啓蒙の重要性を認識し、文学のもつ啓蒙性と教育効果を重視し、文学改良運動の一環として政治小説などを翻訳紹介し、文学改革に「救国の道」を求めたと考えられる。明治維新以後の日本の変化を甲午戦争の敗戦を通して体得した知識人たちは、より一層「変法維新」(欧化、近代化の改革運動)の重要性と必要性を痛感すると同時に、これを実現するために、民衆に対する啓蒙——文学の改革も欠かせないものであることを認識した。従って、日本の明治維新をモデルとして、日本の近代化に欠かせなかった西洋文化の紹介が大いに注目され、日本からの翻訳政治小説を始め、日本文学の翻訳が急速に増えるようになったのである。

日本近代文学史は二葉亭四迷の『浮雲』(1887年)を最初とする。その後、「近代的自我」の追求が日本近代文学思想の最重要問題でもあった(平岡敏夫・東郷克美『日本文学史 近代編』参照)。文芸評論家小田切秀雄(1916～2000年)は、近代文学にお

いての「近代的自我」に関して次のように書いている。

——このような平民主義やナショナリズムと部分的に交流しながら、全体としては明治二〇年代の社会的・精神的状況に鋭く——ほとんど絶望的に——対立することにおいて近代的自我のなまなましい生誕を示したのは二葉亭四迷(一八六四－一九〇九)と北村透谷であった。もともと文学は、具体的個人のがわから状況との関係、つまり自己や他人や社会やとの関係を掘り下げ照らしだすものとして、つねになんらかの形で自我に密着しており、自我の近代的な新しい質を何らかの仕方でとらえることのできる見地・感覚・情念、つまり近代的自我の内面性の成立なくしては近代文学は成立しえないのであって、本来なら日本近代文学は自由民権の運動のなかから素材・主題・情熱を得て成立すべきものであったが(ヨーロッパでは大体がそうなっていた)、運動が短期間のうちに敗退したため、その運動のなかで盛行した政治小説は人間把握の面でまったくの近代小説以前にとどまり、近代小説の成立は明治二〇年代に入って二葉亭四迷の『浮雲』の第一篇の登場をまたねばならなかった。

(『小田切秀雄全集第8巻——近代文学史』(注3))

日本の近代文学作品を翻訳紹介し始めた清朝末期には、主に政治小説、科学冒険小説などのエンターテイメント的な流行作家の文学作品の翻訳が大半を占め、日本近代文学の中で「近代的自我のなまなましい生誕を示した」作家二葉亭四迷、北村透谷らの作品は一篇も翻訳されていない。こういう翻訳現象を見ると、当時、日本近代文学の「近代的自我」に対する追求というより、梁啓超らの政治活動とともに啓蒙思想の影響力が大きかったことが分かる。

最後に、各時代によっての翻訳作品の数量変化と社会の動きとの関連を考察した。中国の各時代における翻訳作品数変化を見ると、時代の変化によって増えたり減ったりするのがわかる。それは、翻訳文学は翻訳家が選んだ作品に対する認識と判断によるものであると同時に、時代、社会環境の制約を受けるためであると考えられる。例えば、清朝末期の知識人による改良運動に伴って、日本の政治小説など46点の作品が中国の文壇に翻訳紹介されるようになった。その後、1919年の中国近代化の出発点となった「五・四運動」が始まってから三十年代の間に、日本文学作品の翻訳数は525点まで上る。しかし、抗日戦争(1937～45年・日本では「日中戦争」と称する)が始まってからは、日本文学作品の翻訳数は、戦前より急激に減少する。また、1949年中華人民共和国の成立以後、日本文学翻訳紹介の作業も新たな展開に向かう

が、「五・四運動」以後の状況と比べるとそれほど増えたとは言えない。新しい時代とともに翻訳文化にも一定の発展がみられたが、1966年頃から始まった外来文化を拒絶する文化大革命により、日本文学の紹介もまた停滞期に入った。特に1968年から1970年まで、日本の翻訳作品は一冊も見つけることができず、この時期には翻訳されなかったと思われる。文化大革命が終息してから、日本文学の紹介に新たな活力が現れ、現在に到るまで3000点にまで上っている。

本研究は、清朝末期から「五・四運動」(1898～1919年)まで、新文化運動(1917年)から抗日戦争前(1936年)まで、抗日戦争から中華人民共和国成立(1937～49年)まで、建国から改革開放前(1939～79年)まで、改革開放以後(1979年)から現在までの五つの時代に分けて、翻訳作品数の変化(外来文化の吸収)と中国の時代変遷を追究した。

注

注1:中国国家図書館のOPACでの日本題名は『みは人のためならず』になっているが、正確な原題は『盗みは人のためならず』(徳間書店・1980年8月刊)である。

注2:翻訳作品をまとめた文献:譚汝謙編『中国訳日本書総合目録』(香港中文大学出版社・1980年)、comp. by International House of Japan Library『Modern Japanese literature in translation : a bibliography』(Tokyo : Kodansha International・1979年)

注3:小田切秀雄著『小田切秀雄全集第9巻——近代文学論』(勉誠出版2000年11月20日)中「日本近代の自我の歴史」三九～四〇頁

目　次

第一章　清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介 …… 1

第一節　はじめに …… 1
第二節　日本の政治小説 …… 4
第三節　清末の政治小説の翻訳状況 …… 7
第四節　中国の近代化と翻訳小説 …… 10
第五節　中国におけるその他の小説の翻訳 …… 15

第二章　新文化運動(1917年)から抗日戦争前(1936年)まで …… 21

第一節　新文化運動以後の中国文学概況と翻訳特徴 …… 21
第二節　日本の中国留学生の文学(翻訳)活動 …… 26
第三節　「文学研究会」の創立と外国文学の翻訳 …… 33
第四節　「内山書店」と日本文学作品の翻訳 …… 40
第五節　白樺派の翻訳 …… 42
第六節　自然主義小説の翻訳 …… 46
第七節　耽美派の翻訳 …… 50
第八節　新思潮派・新現実主義小説の翻訳 …… 53

第三章　戦争文学と反戦文学の翻訳
——抗日戦争から中華人民共和国成立(1937～49年)まで …… 64

第一節　抗日戦争と解放戦争時期の中国国内文学概況と翻訳 …… 64
第二節　石川達三の『生きてゐる兵隊』の翻訳 …… 71
第三節　火野葦平の『麦と兵隊』の翻訳 …… 78
第四節　鹿地亘の反戦文学作品の翻訳 …… 85
第五節　佐藤春夫らの作家の「転向」と翻訳の変化 …… 93

第四章　建国から改革開放(1949～79年)までの三十年 …… 99

第一節　文化政策の変化と翻訳作品 …… 99
第二節　三島由紀夫の小説の翻訳 …… 104
第三節　プロレタリア文学及び戦後文学の翻訳 …… 109

第五章　改革開放以後(1979年)から現在までの翻訳事情 …… 116

第一節　改革開放以後の文学思潮と翻訳 …… 116
第二節　青春小説の翻訳と民衆の内面的世界 …… 121
第三節　恋愛小説の翻訳 …… 128

あとがき …… 138

参考文献 …… 143

第一章　清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介

第一節　はじめに

翻訳文学は文学史の中で特殊な部分である。一国のすべての作品が異国で翻訳されるわけではない。それは国の文芸政策、民衆の社会意識が違うからである。つまり、社会の動向と深いつながりを持つ文学のうち、とりわけ翻訳文学の場合は、自国の文学にない要素(内容)、方法を外国から取り入れるという意味において社会や時代の動向と深い関係を持っていると考えられるのである。

19世紀末から20世紀初頭の清朝末期における中国の文学状況は、阿片戦争(1840～42年)の敗北以来、イギリス・フランスを始めとするヨーロッパ列強の帝国主義的侵略の脅威及び腐敗しきった清朝の旧体制、また変法自強の策という、新政を行なうための政治改革運動がクーデターで鎮圧される国内政治情勢の動揺にともなって変化が生じ、まず第一に外国文学の翻訳が頻繁に行われるようになった。

明代から清代にかけて、中国は主として自然科学・技術の分野で、西欧の文化を導入した。しかし、清末末期、帝国主義諸国の侵略を受ける時代になると、中国は西洋の勢力と激しい接触をしなければならなかった。当時、中国は自身を見直すためにも、西洋の思想、文学に無関心ではいられなくなったのである。

このような社会状況の中から生み出された当時の文学作品は、一般的に諷刺或いは暴露というような消極的な態度を超えて、積極的で、露骨なものに変わり、政治責任者への責任追及に集中する形をとった。こうした政治的理由で、この時期に急に政治小説という読物が多量に翻訳されるようになった。特に戊戌政変(1898年)の失敗以後、国内改造の問題に急激に目覚めた有識者は、自分たちの生活の実情や、それにつながる政治のあり方について、反省批判を加えるとともに、新しい生活や政治の未来像を描き出すことに救いを見出そうとした。

清朝末期に創作された李伯元(1867～1906年)の『官場現形記』(『官界現行記』・1901年)、呉趼人(1866～1910年)の『二十年目睹之怪現状』(『20年の目の当たりに見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るおかしな現状』・1903年)、劉鶚(1857～1909年)の『老残遊記』(『老残の旅行記』・1896年)、曾樸(1872～1935年)の『孽海花』(『孽海の美人』・1905年)などの清末の小説は、形式上から見ると口語的表現による『三国志演義』(1522年)、『西遊記』(1570年)、『水滸伝』(1589年)、『紅楼夢』(1791年)等の長編小説の伝統を基本的に受け継ぐものであったが、その内容としては、全面的に清朝末期社会の動乱、つまり変革に向けての激しい動きを表現し、当時の流行や政治、社会の暗黒部分や腐敗の現状への諷刺や暴露、或いは譴責(過失を責め咎める意)という傾向を反映していた。例えば、『老残遊記』では、老残という一旅医の遊歴見聞を借りて各地の風物を写すとともに、清廉官吏の独善が貪官の私利を図る官僚の腐敗に対し痛烈な批判を加えた。『孽海花』でも状元(科挙の試験で「進士」の首席合格者)と娼婦たちとの遊びを通じて、京城の内外の文人、文官たちの腐敗堕落した当時の社会現実を風刺したのである。つまり、清朝末期の小説は、多くは一般社会、特に官僚を中心とする政治の実態を暴露、攻撃を主とするものであった。また、小説に対して啓蒙的役割を大きく期待した一部の知識人は、先進国の文明を小説の発達と結びつけて、外国作品を紹介することから着手し、フランスの小仲馬(Alexandre Dumas fils,1824～95年)の『巴黎茶花女遺事』(La Dame aux Camélias,1899年訳)、アメリカの史拖活夫人(Mdm Harriet Elizabeth Beecher Stowe,1811～1896年)の『黒奴籲天録』(Uncle Tom's Cabin,1901年訳)、ロシアの普希瑩(Алексанр Сергеевич Пушкин,1799～37年)の『俄国情史』(Капитанская дочка,1903年訳)などが翻訳され、外国の小説作品の紹介を通じて、「近代化」の道を模索していたと考えられる。

この清朝末期時代における翻訳文学の隆盛は、日本文学に関しても変らなかった。特に日本文学の場合は、「近代化」という観点から中国と日本は類似点がたくさんあり、日本文献の中国語訳が盛んに行われた。

本書の中に記載した翻訳作品リストが示すように、清朝末期(「甲午戦争」以後)から日本近代文学作品が翻訳され、政治小説を始め、科学冒険小説、探偵小説、軍事小説が次々翻訳されている。例えば、東海散士の『佳人之奇遇』(1898年訳)、矢野龍(竜)渓の『経国美談』(1899年訳)、大橋乙羽の『累卵之東洋』(1901年訳)、押川春浪の『空中大飛行艇』(1903年訳)、江見水蔭の『地中の秘密』(1906年訳)、桜井忠温の『肉弾』(1909年訳)等が紹介された。

清末における日本近代文学作品の紹介と翻訳の研究について、私の目に入る限り、今まで本格的な研究はなかった。唯一先行研究といえるのは、中村忠行の論文「政治小説に於ける比較と交流」(注1)である。中村忠行はその論文の中で、中国政治小説の研究における日本の政治小説との比較の意義を論述し、両者の関連に一つの

史的概観を与えている。中村忠行の論を要約すると次のようになる。「清朝末期民初に於ける政治小説の流行は、明治日本の政治小説の影響によるものであって『清議報』第一冊以下に連載された梁啓超訳の『佳人奇遇』と『経国美談』こそは、明治期に於いて果たした政治小説の役割と、彼此類似する点は多い。梁訳『佳人奇遇』が初めて世に出たのは、光緒廿四末、すなわち明治卅一年十一月の事であるが、この前後の数年間は、明治の政治小説史上でもかなり重要な意味を持っているし、政治小説といっても、両者の間にはかなりの隔りがあることである。また前期に見られた華夷獨自の思想は、この期に入って漸く薄れ、日露戦争に於ける日本の勝利に刺戟されて、漸く愛国心に変じ更に反帝国主義・反買弁の思想に変り、中国不亡の信念にすらなっている。反帝国主義・反買弁などの思想が強く反映しているのも、わが国の政治小説には見なれぬところである。」

しかし、中村忠行の整理した、清朝末期に中国に向けて翻訳された17篇の明治日本の政治小説のリストを検討してみると、あるところは「現物」を基にリストを組み立てていないことが分かる。例えば、氏が整理した翻訳リストの一覧を見れば分かるように、「清議報」に翻訳掲載された東海散士の『佳人之奇遇』、矢野龍(竜)溪の『経国美談』、徳富蘆花訳の『百合の花』、『鉄公の退隠』、『王の紛失』などの翻訳状況に関する書誌は、「翻訳者名」、「作品の中国語タイトル」、「作家名と原題(日本名)」、「翻訳刊行所(翻訳刊行雑誌)」、「翻訳刊行年月日」の順に詳細に正しく整理されている。しかし、以下の作品が抜け落ちている。

玉瑟齋主人訳　回天綺談(加藤政之助纂訳『英國名士回天綺談』)『新小説』
五・六號　光緒廿九年五月・六月？(1903.5・6?)
訳者未詳　白絲線記(徳富蘆花訳の『白糸』)同　六號
光緒廿九年六月？(1903.6?)
梁啓超訳　俄皇宮中之人鬼(徳富蘆花訳の『冬宮の怪談』)『新小説』?
賴子　訳　政治波瀾(佐々木龍の『新波瀾』)?
?
(＊「?」は、中村忠行が作成したリストの中の調査不明を表す)

これらはいずれも雑誌「新小説」(1902年11月横浜で創刊)に掲載されたものであることを考えると、中村忠行は「新小説」の調査を怠ったものと思われる。これを見れば、明らかなように、中村は「新小説」に掲載された翻訳作品にはほとんど眼を通してないことが明白である。賴子訳の佐々木龍の『新波瀾』に対しても「翻訳刊行所

(翻訳刊行雑誌)」、「翻訳刊行年月日」が不明になっている。阿英の『晩清小説史』にも、ただ「翻訳者名」、「作品の中国語タイトル」、「原作家名」しか表記されてないことから見ると、「現物」に当たらず阿英或いは誰かが作った翻訳文献目録をそのまま記載したと推測できる。上記に対しての正しい書誌は、以下のようになる。

玉瑟斎主人訳 回天奇談(加藤政之助纂訳『英国名士回天奇談』)『新小説』第4・5・6号
光緒二十九年五月十五日～六月十五日(1903.5.15・6.15)
披髪生訳 白絲線記(徳富蘆花訳の『白糸』) 『新小説』第6号
光緒二十九年六月十五日(1903.6.15)
曼殊室主人訳 俄皇宮中之人鬼(徳富蘆花訳の『冬宮の怪談』)『新小説』第2号
光緒二十八年十一月十五日(1902.11.15)
賴子訳 政治波瀾(佐々木龍『日本政海新波瀾』) 上海作新社
光緒二十九年(1903)

しかし、例え不十分な資料とはいえ、中村の「政治小説に於ける比較と交流」は我々書誌学研究の徒にとっては貴重な資料であることに変わりはない。

本書は、中村の先行研究の成果を踏まえて、清朝末期にどういう作品が翻訳されたのか、またなぜ清朝末期という時代に翻訳されたのか、というようなことについて翻訳作品と社会の動き(時代背景、社会環境)との関連から考察を試みたいと思う。

ただ、「日本の政治小説」に関する先行研究(注2)を見れば分かるが、日本で政治小説が盛んに書かれ、読まれた時代と中国でそれが翻訳されるようになった動機とはいくらかの時代的ずれがある。日本での政治小説の最盛期をいつと定めるかは研究者によって、違いがあるが、公約数的に考えて、明治22(1889)年ごろとすると、7、8年から10年のずれがある。

第二節 日本の政治小説

日本では明治初期に「富国強兵」「殖産興業」などのスローガンが掲げられ、国民の思想を近代的なものに切り変えていく啓蒙運動は政治思想にも及び、欧米における民主主義思想の紹介・導入が活発になった。日本の国民は人間の権利は本来平等であるべきことを知り、国会の開設、憲法制定、地租軽減、地方自治、不平等条約撤廃と

いう五大要求を掲げ、明治政府が意図する絶対主義的天皇制国家に対し、民主主義的な立憲制国家をめざして自由民権運動が起こった。

この自由民権運動は明治7(1874)年板垣退助らの「民撰議院設立建白書」の提出から始まっているが、間もなく、この思想啓蒙普及を意図した文学作品が現れた。それは、西欧の著作の翻訳と創作とに分けて見ることができる。

明治10(1877)年代になると、日本の小説の世界にも新しい動きが顕著になる。一つは翻訳小説の出現であり、もう一つが政治小説の発生・盛行である。この二つは本来、別のジャンルであるが、翻訳小説の中には政治小説の範疇に入るものがあり、政治小説の発展に大きな影響を与えている。

西洋文明の崇拝、文明開化熱のみなぎった明治の初期、新知識移入の必要から欧米の著作についてのおびただしい翻訳・紹介が出版された。例を挙げると、中村正直訳の『西国立志編』(1870～71年・明治3～4年)、斎藤了庵訳の『魯敏孫全伝』(1872年・明治5年)、渡部温訳の『通俗伊蘇普物語』(1873年・明治6年)、小林謙吉訳の『西洋孝子流別奇談』(1874年・明治7年)、永峯秀樹訳の『開巻驚喜暴夜物語』(1875年・明治8年)、村上俊吉訳の『天路歴程』(1876～77年・明治9～10年)等々である。

その中にあってイギリスの作家・政治家ロード・リットン(エドワード・ブルワー・リットン)の『アーネスト・マルトラヴァース』(1837年)および続編『アリス』(1836年)を抄訳した丹羽純一郎の『欧州奇事 花柳春話』(1878～79年)はその最初の成功例である。この作品は、当時、おおいに歓迎され、その後、このタイトルを真似た小説が続出した。この系統の、いわゆる文学的な小説の翻訳には、橘顕三訳のスコットの『春風情話』(1880年)や坪内逍遥訳のスコットの『開巻悲憤 慨世士伝』(1885年)や益田克徳訳のリットンの『夜と朝』(1889年)などがある。

一方、科学・冒険小説の翻訳も未知の世界への憧憬からいくつか出た。その中では、ジュール・ヴェルヌ(フランスの作家、SFの先駆者)原作・川島忠之助訳の『新説八十日間世界一周』(1878～80年)がよく知られている。ヴェルヌの小説は、その後、井上勤訳の『九十七時二十分間 月世界旅行』(1880年)、『月世界一周』(1883年)、『六万英里 海底旅行』(1884年)等、続々翻訳された。

更に、政治小説の翻案・翻訳がある。明治15(1882)年になると、高まりつづけた自由民権運動や一般の政治熱が最高潮に達した。その影響で翻訳小説にも、明らかに政治意図を持ったものが出現した。

日本において政治小説とは、文学史的には明治に入って西欧の政治思想が盛んになってから現れた、自由民権運動の主義、主張の宣伝のために書かれた明治15(1882)年頃から明治23(1890)年頃までを頂点とする小説を指す。明治17(1884)年

から明治21(1888)年の間にイギリスの政治家ビコンズフィールド伯ベンジャミン・ヂスレーリの政治小説または人情小説、『春鶯囀』(1884年)、『政海之情波』(1886年)、『双鶯葉春話』(1887年)、『大膽書生』(1887年)、『昆太利物語』(1888年)など五篇と、リットン『ケネルム・チリングリ』の翻訳『諷世嘲俗 繫思談』(1885年)などが日本に紹介移入された。当時、ヂスレーリの翻訳小説が、日本の政治小説界に及ぼした影響は、極めて大きいと言われている。柳田泉は『政治小説研究』の中(注3)で、「ヂスレーリの訳文小説が、日本の政治小説界に及ぼした影響に至っては、極めて大きい。それは、政治小説というものゝ模範なり基準なりを与えて、これが本格の政治小説だということを教えたからである。」と評価している。

日本の政治小説は主にイギリスの影響を受けながら、フランス文学にも影響を受けたのである。先の『政治小説研究』(注4)によると、当時自由党の総理板垣退助がフランスを訪問する際、ヴィクトル・ユーゴーに面会して、自由民権論の先達として敬意を表し、かつ教えを受けたという。ユーゴーは板垣退助に「余を以て日本の現勢を察するに、蓋し人民を観感興起せしむべき欧米自由主義の政論稗史の類を其国の新聞紙上に続々掲載するを急務と思はるゝ也。」と言ったという。板垣退助はユーゴーの言葉に大いに感激して、滞欧中に、克明に政治小説の類を集め、それを携えて、1883年6月に帰朝した。こういう状況の下で、80年代は日本で政治小説翻訳のブームとなっていた。

政治小説の翻訳と同時に、創作も始まった。戸田欽堂の政治寓意小説『民権演義 情海波瀾』(1880年)は自由民権の思想で当時の政界をとらえた政治小説の嚆矢と言っていいだろう。以降、政治小説は自由党と改進党の二政党の活動を背景に書かれ、その内容は政党の盛衰と運命をともにした。

本格的な創作の政治小説としては、最初に広く注目されたのは、改進党系の矢野龍(竜)渓の『斉武名士 経国美談』(1883～84年)であった。つづいて出現した東海散士の『佳人之奇遇』(1885～97年)も『経国美談』と並ぶ雄編で、はじめのほうだけでも数十万部売れたといわれている。『経国美談』と『佳人之奇遇』は、明治10年代の政治小説を代表する作品で、前者は19世紀にイギリスで出たギリシャ史の諸著に材をとり、それらをアレンジしながら、半ば翻訳半ば創作というような方法によって、都市国家テエベがスパルタの専制支配と闘って独立しギリシャの盟主となるまでの入り組んだ経過を、人物中心につぶさに叙述し、後者は、日本人を主人公にし、スペインの愛国女性やアイルランドの亡命女性や中国の明の遺臣やハンガリイの志士らを登場させ、それらの国の紛乱した政情と、登場人物たちの熱い憂国の情を次々と繰り広げて、独立戦争時代のアメリカのことや、イタリイのガリバルディの活動や、

ポーランドの当時の実情なども詳しく物語の中に登場させていた。この『佳人之奇遇』は、登場人物の口を借りて当時の世界情勢を民族独立の立場から詳細に論じ、特に弱小諸民族の苦悩と闘争を語っていた。外国や全世界を舞台にしたこれらの雄編に対し、一方では、日本の政界の内情を写実的に描いた政治小説も登場した。末広鉄腸の『政治小説 雪中梅』(1886年)は、在野の志士国野基が政治活動に没頭し、下獄するが、出獄後、富永お春と知り、めでたく結ばれるというストーリーで、作者の主張が国野によって代表されている。『政事小説 花間鶯』(1887年～88年)はその続編である。また、須藤南翠の『雨牕漫筆緑簑談』(1886年)、小宮山天香の『涙の谷』(1888年)等も注目された。日本の政治小説作家は、ほとんど政治家或いは社会的エリートであった。例えば、矢野龍(竜)渓は大蔵省書記官、末広鉄腸は後に衆議院議員になるような人物であった。

第三節　清末の政治小説の翻訳状況

中国における西洋文化の翻訳、紹介は、既に16世紀の初期から始まったのであるが、これは主として外国人宣教師によって行われたものである。十六世紀の頃、ヨーロッパの一部分の国は資本主義の本源的蓄積時期に入り、資本家階級先遣隊の植民地主義者として対外略奪、宣教師の活動と文化の交流が始まった。

最初にキリスト教宣教師として来航し中国伝道を行ったのは、ポルトガル人である。嘉靖32(1553)年、ポルトガル人は、広州港外に至って、中国への伝道をめざした。

その後、イタリア出身のイエズス会宣教師マテオ・リッチ(1552～1610年)を初め、多くのイエズス会宣教師が来航し、中国への布教に努めた。彼は、中国名を利瑪竇(リマトウ)と名乗り、『天主実義』(1595年刊、カトリックの教義の漢訳本)やエウクレイデス(ユークリッド)の幾何学の前半部の漢訳である『幾何原本』(1607年刊)などを翻訳した。特に彼が作成した『坤輿(コンヨ)万国全図』(1602年刊、坤輿は大地の意味)は中国最初の世界地図で、中国人に大きな影響を与えたと言われている。

ドイツのイエズス会宣教師アダム・シャール(1591～1666年、中国名は湯若望)は、1622年に中国に渡来し、崇禎帝の命により、徐光啓らと『崇禎暦書』の編纂と大砲の鋳造を行った。イエズス会宣教師は、清代になっても活躍し、ベルギー出身のフェルビースト(1623～88年、中国名は南懐仁)は、1659年に中国に到着して清朝に仕え、アダム・シャールを助けて天文台の仕事につき、天文観測や修暦の仕事にあたった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com